

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

小川浩平

指導教員 湯口雅史

## 1. 緒言

2019年12月に中国・武漢市で報告された原因不明の肺炎は、「COVID-19」（新型コロナウイルス感染症）と名付けられ、世界中に拡散された。日本国内では、2020年4月上旬時点における感染者急の増加を受け、政府は全国を対象とした「緊急事態宣言」を出し、感染拡大防止に向けて外出自粛の呼びかけや飲食店の時短営業などの要請を国民に呼びかけた。文部科学省は、感染者の増加を受け、全国の小中高校に2月27日、3月2日からの一斉休校を要請した。2020年5月25日に緊急事態宣言が解除された際に、徳島県は「緊急事態宣言の解除に伴う教育活動の再開について」の通知を出し、2020年5月21日（木）から、分散登校ではあったが、学校を再開した。文部科学省も、学校の教育活動を再開するにあたって、児童生徒等及び教職員の感染リスクを可能な限り低減することを目的とした『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル』～『学校の新しい生活様式』～について（2020/5/22）を示した。しかしこの通知は、「本マニュアルは、令和2年5月時点での最新の知見に基づき作成したものです。今後新たな情報や知見が得られた場合には随時見直しを行うものであることを申し添えます。」ともあり、2020年6月16日、8月6日、9月3日と通知され、現在12月3日のものが最新となっている。このように、学校での感

染防止に向けて、国、地方自治体、学校現場が一体となり、コロナに関する様々な情報を共有しながら、網渡り的に日々を過ごしているのが現状である。

このような状況のなか、小学校においては新学習指導要領（平成29年告示）が全面実施となる年であり、資質能力をベースとした学習展開が期待されていた。

しかし、学校現場の状況は、学校の新しい生活様式に示されているように、『密閉』、『密集』、『密接』の『3つの密』を避ける、『人との間隔が十分とれない場合のマスクの着用』及び『手洗いなどの手指衛生』など、基本的な感染対策を継続する」ことが求められている。特に体育授業は、子ども同士の接触回数や大声での応援等が存在し、従来のような体育授業を実践できないのではないかと想像する。

そこで、コロナ禍という難しい状況の中で、先生方はどのような創意工夫をしながら子どもに運動機会の保障と、運動する楽しさを味わわせているのだろうかと関心を寄せたのである。今後、with コロナ・アフターコロナを見据えての体育授業を行っていく上で、どのような工夫を行って進めていくのだろうか。コロナ禍におけるよりよい体育授業への志向はどのような実状なのだろうか、その実際を探索していきたいと考えた。

## 2. インタビュー調査

### 2-1. 目的

本研究は、徳島市内の小学校では、体育授業をコロナ禍の中でどのように実践しているのかを、インタビューを通して知り、各小学校、各先生方の、コロナ禍における体育授業への取り組みの共通部分を検討していく。さらに、体育授業における、先行研究の授業実践をもとに、比較をすることで、今後のコロナ禍における体育授業の検討やアフターコロナの体育授業に活かすことを目的とする。

### 2-2. 方法

#### (1) 研究対象

徳島市内の小学校に勤務している体育主任や体育を研究教科としている6人の教員

#### (2) データ収集法

半構造的インタビュー

#### (3) 分析方法

テキスト分析用ソフトウェア KH Coder

### 2-3. 結果と考察

徳島市内の小学校教諭にインタビューを行い、その分析結果から、当事者の心理や見方、考え方、感じ方を理解しようとし、「体育学習の実際」について考察した。その中で次のことが見えてきた。

#### ① 単元計画の入れ替え

#### ② 学校単位での取り決め

#### ③ 教師のコロナ禍での授業づくり

## 3. ポストコロナへの展望

with コロナの実践において、「物の共有を控える」「一人一つのボールを用意する」「物を触った手で顔を触らないよう声掛け」などの取り

組みのもとで体育学習が始まったが、単元が進むにつれ、「ボールの共有を行っても、授業中に手で顔を触らない、授業後に消毒をする」など、問題がない範囲を見つけ、ボール運動を実施する、先生方の実践に基づく知見を得られたと考える。全てを制限してしまえば、子どものストレスになりかねない。子どもが精一杯運動できる授業にするためには、岩田(2005)が述べる「やさしい教材づくり」や今回改訂された新学習指導要領にも記述されている、「簡易化されたゲーム」や「易しい場」の工夫が必要である。従来のようなペア学習や、人と人が長時間接触するような手つなぎ鬼などは避ける必要があるが、作戦タイムで密になりすぎない、場を広くとるという工夫は、コロナ禍の体育授業として有用だったと考える。

ポストコロナの体育について、インタビューで得たことや先行研究などの蓄積した知見をもとに、場・教材等の工夫が必要であることは当然である上に、子どもが、精一杯運動ができる授業を実践していかなければならない。今後は、密や人と人の長時間の接触を控える取り組みが、コロナが収束するまで必要である。コロナ感染症拡大のおそれも収まり、子どもが、友達と夢中になって運動に取り組むことができるようなビフォーコロナ時代の体育授業が実践されることを切に願う。